

白雲片片

第三回

翠微来意問答

今回は翠微無学禪師とその法嗣・清平令遵禪師が登場する古則を紹介致します。

無学禪師は丹霞天然禪師の法嗣で、翠微寺の住職をしていた方です。遷化した年月日等不明ですが、私たち宗侶の法系からすると雲巖曇晟禪師と大体同じぐらいの時代を生きた方ではないかと思われまふ。僧名は無学ですが、古則の中では翠微と表記されていますので翠微禪師と書くことにします。

その法嗣の令遵禪師は文中では法喜禪師という名で登場しますのでご注意ください。

正法眼蔵三百則の第七十一則

『こ挙す、鄂州清平山法喜禪師、翠微に問と

うて云く、如何ならんか是れ西来的的この

意。翠微云く、人無きを待つて即ち你なんじ

に向かつて道うべし。師、良久して云く、

人無し、請う、師、説かんことを。翠微、

禅牀を下り、師を引いて竹園に入る。師、

又た云く、人無し、請う、和尚、説か

んことを。翠微、竹を指さして云く、這

の竿は恁麼に長きことを得たり、那の竿

は恁麼に短きを得たり。』

以上が古則の全文です。

「挙す」というのは自分の経験した話ではなく、他の祖師方の問答を取り上げて説法する時に使う言葉です。

鄂州という地方にあった清平山という山の寺院で住職をしていた法喜禪師

(令遵禪師)が、師匠の翠微禪師に「菩提達磨大師がはるばる西のインドの方から中国に渡つて来られた、明瞭明白なその意図というのは一体何でしょうか？」と質問をしました。

これに対して翠微禪師は「よし、他の人に聞かれてはまずいから、誰もいなくなるのを待つてからお前に話してやろう」と言いました。

そして令遵禪師はしばらく時間が経つてから「さあ、師匠、誰もいなくなりましたので教えて下さい」と言うと、翠微禪師は坐禅をする場所から下り、令遵禪師を引いて竹やぶに入つて行きました。

師匠が答えを勿体ぶるものですから、令遵禪師は竹やぶの中でもう一度「さあ、もう誰もいません。どうか教えて下さい」と言いました。

すると翠微禪師は竹を指さして、「この竹はこのように長い、あの竹はあのように短い」と答えました。

翠微禪師は弟子の令遵禪師の質問に対して、人に聞かれてはまずいからと言ってなかなか答えませんでした。多分、どうやって教えてやろうかとじっくり

考えていたのでしょうか・・・。

達磨大師が西の地からわざわざ中国に渡ったのにはどういう意図があったのか、という質問は、釈尊の教えの中心は何なのかということと同等の意味を持ち、昔からとても好まれた質問で多くの古則に出てきます。

さて、翠微禅師の答えは一見わけが分からないことのように思えますが、その真意は深遠です。

長い竹もあれば短い竹もある、さまざまの物事が集まってできているのが私たちの住んでいるこの世の中です。長い竹、短い竹、個別的な違いがあれば、竹は竹だと一まとめにした見方もできません。人間も個人個人の特徴があり、男女の違いがあります。そして人間として一くくりにすることもできません。

梅花流詠讃歌で例えれば、声色が良い人もいれば比較的良くない人もいる、リズムを取るのが上手い人がいれば苦手な人もいる、細かく分けることができると同時に複数の人が集まった梅花講という一つの組織として見ることもできます。個人としてしか見ないのも間違いだし、集団としてしか見ないのも間違いです。先入観や習慣的になってしまつて

いる見方に固執せず、素直に現実をみることに、このことが釈尊、そして達磨大師の教えの中心に含まれていることは間違いありません。

若い頃の令遵禅師は、師匠が特別な指導をしてくれるかもと期待をしていたかもしれない。しかし師匠の口から出たのは「この竹はこのように長い、あの竹はあのように短い」という一聞しただけだと平凡にしか感じない言葉でした。この時、令遵禅師はどう感じたのでしょうか。もしかすると多少の肩透かしを食らったかもしれない。

般若心経に出てくる有名な「色即是空」の四文字は「この世のありとあらゆるものは即ち是れありのままである」という意味です。例えば、爬虫類が可愛いので好きな人がいたとします。逆に爬虫類は気持ち悪いから嫌いだという人がいたとします。この場合、どちらが正しい

いのでしょうか？恐らく正否を問うことが重要なのではなく、どちらも事実だということが重要でしょう。さらに釈尊の教えを踏まえてみるならば、爬虫類を可愛いと思おうと、気持ち悪いと思おうと、爬虫類は爬虫類としてただありのままに生きているということもまた事実です。

道元禅師が詠まれた和歌に
春は花 夏ほととぎす 秋は月
冬雪さえて 涼しかりけり

というものがあります。自然が本来有しているありのままの素晴らしさを詠まれたものです。竹もいろいろだし季節もいろいろ、それぞれが素晴らしいと祖師方は様々な方法で今に伝えておられます。参考文献「西嶋和夫著 真字正法眼蔵提唱上巻二」。

